

松沢研究奨励賞受賞者 研究報告

よく考え 伝え合い みんなで学ぶ 菅生っ子

～社会とすすんで関わる子を育てる授業づくり～

教育人間科学部学校教育課程 H18 年 3 月卒

川崎市立菅生小学校 総括教諭 西条 雅之



1 はじめに

本主題は、本校が令和4・5年度の川崎市研究推進校（社会科）として掲げたテーマである。今回報告する実践を行った令和5年度は、新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、GIGAスクール構想の過渡期であり、そして「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のロードが教育現場で広まり、ますます不断の授業改善が必須となる...そんな時期であった。“急激に変化し、予測困難な社会”を、子どもも大人も今まさに生きていることを実感した。

そんな中、私たち菅生小職員は「子どもたち一人ひとりが学習を自分事としてとらえ、真剣に学びに向かう姿」「材や他者、自分自身との豊かなかかわりの中で、全員が参加し、心と学びが動く授業」を目指してきた。そしてそのために、「目の前の子どもたちの実態や教師の願い」「単元のねらいと教材の価値」「学習活動の工夫」などに焦点を当てながら研究を進めた。

2 実践報告 令和5年12月実践

5年社会科「森林とともに生きる～この木、響く木、希望の木～」

(1) 指導の工夫

①子どもたちと「森林」との出会い

川崎の子どもたちと「森林」のつながりは希薄である。本校学区では比較的に緑の風景及びそれらを残す取組はあるが、林業を目にしたり、森林の役割や課題を実感したりする機会は少ない。とはいえ、法整備や税金の導入など、この十数年で森林保全や木材利用に関するトピックは増えている。本市は他都市に先駆け木材利用が促進され、駅や商業・公共施設が近年でみるうちに木質化されている。今回は小田原市

の取組も取り上げつつ、「実は川崎市（菅生小）って森林とつながりが深いんだ」という気づきをねらった。また、木材の香り、質感など、実物に触れてこそ、そのよさや役割に気づけるのではないかと考えた。さらに、森林保全・木材利用にかかわる人々の思いに迫れる具体的資料など、子どもがますます追究し森林を語りたくなるよう学習環境を整えた。

②自然環境と国民生活とのつながりを見通し、自ら選択し、考え、深められる単元構想

我が国の国土の自然環境と国民生活の関連について、大単元の中での「森林、災害防止、公害防止」の各単元の位置づけやつながりを意識した。自然豊かな日本だからこそ、自然の恩恵、喜び、感動体験があれば、危険性や脆さ、社会生活への甚大な影響もある。だからこそ、この国に生きる私たちは、自然と上手に付き合わなければならない。調べたことをもとに考えたり、学習を自己調整したりしながら学びを積み重ね、自分の考えを深められるよう支援した。

③未知が多いからこそ、驚きと変容のある学びを生み出せるように

「水は節水すべき」「ごみはしっかり分別すべき」「森林も大切すべき」。これらは、とすると学習前にも子どもたちは生活経験の中で学び、語るだろう。しかし「今、日本の森林はどうなっているの」「森林を大切にするとどういうこと」と問い直すと、学習前はわからないことも多く、だからこそ様々な立場の人々の取組に対して、疑問や驚きを抱きやすい単元ともいえるだろうと考えた。単元のはじめに意識調査することで、途中で認識を問い直したり、学んだことを活用して話し合ったりして、自らの変容・成長に気づけるようにすることをねらった。

(2) 指導の実態

①単元導入 「森林」のことって、実はよくわからないかも

「え！日本の森林ってこの50年間で、増えているの？」という大きな驚きから始まった本単元。おそらく、森林伐採などのイメージが強かったのだろう。導入の意識調査の「森林は大切（88.9%）」「日本の森林が増えていることに安心した（88.9%）」「森林はできるだけ切らない方がよい（80.4%）」などの回答結果は、これ以降の学習で自分たち自身を揺さぶるものにもなった。

②単元中盤 木に触れ、木を感じ、追究する

「クスノキは、温泉にありそうなにおいで、すうすうする」「森林作業のズボン、場所によって厚さが違う。あ！きっと理由は……」子どもたちは五感で木を感じながら、森林の役割やよさ、それら守る人々の様子を意欲的に調べていった。特に、若手作業員さんの「自分たちの力で自然災害を防げると思える」という言葉に、尊敬と感謝を感じた子どもが多かった。

③本時 「木材をたくさん使って改修した私たちの菅生小 よかったのかな？」

日本の森林にはまだまだたくさん課題があることを知った子どもたち。これからの森林とのかかわり方を考える上で、最も身近な「自校の木質化」を取り上げた。本校の再生整備改修は、実践の3年前に竣工したばかりで、改めて選択・判断し、よりよい未来を考える上で、教材としての価値が高いと考えた。

「先生、この学校に使われた木って、国産ですか、外国産ですか」この声から始まった話し合いは、それまでの学習を踏まえながら、「森を守る人々」「木材を利用する私たち」などの立場で、多角的に展開した。中盤、話し合いに実感を与える資料として「校舎に触る」こととした。これには、今回の教材開発で私がかかわった設計会社、民間団体、森林組合の三者が同様に話していた「木のよさは触ればわかる、子どもに触ってほしい」という思いを資料化した。教室を出て、ぺたぺたと手を壁や手すりにおいて確かめると、「あ！全然違う！」「先生、こ

こを両手で触るとわかりやすいです！」と、多くの子が場所や材質による手触りや温度の違いに驚いていた。木質化された空間で過ごす私たちにとってのよさを実感しつつ、様々な視点からメリットを見出し、これからの森林を考える上でのヒントとすることができた。

④単元末 これから私たちと森林とどうかかわっていく？

これまで資料内で登場していたゲストティーチャーを招き、自分たちの学びの成果や、未来の森林についての思いを直接伝えた。「木材活用は手段。目的は森林を守り、その役割を正常に保つこと」。いただいたこの言葉が、単元を総括するキーワードにもなった。単元のふり返りでは「森林の未来のことは、最初は心配だったけど、ちょっと安心した」「漁業とか食とも森林はつながっていることに気づくことができた」「本当の森林の種は、森林を支える人々だ！」など、明るい未来を考えようとしていることが読み取れる記述が表出した。

4 終わりに

5年生の社会科は、学習の舞台が日本全体に広がり、とりわけ本単元は「どこか遠い場所のお話」で終わってしまいかねない。その中で本実践では「森林」を自分事としてとらえ、切実に考える様子が見られたことが、大きな成果である。

また、縁あって令和6年度も、この学年を担当することとなった。6年社会科の政治・歴史・国際単元を通して「よりよい・幸せな社会」を1年間、ともに問い続けてきた。学習のふり返しには「でも」が増え、自ら批判的思考と葛藤を繰り返しながら考えを表現していることがうかがえた。またGIGA端末の活用により、学習活動の幅がますます広がり、様々な方法で問題解決を試みたり、他者と協働的に学んだりすることを楽しむ様子が見られた。これからも、社会の一員として社会とかかわりながら、自ら学びを創り深めていく子どもたちの姿を目指し、授業改善に取り組んでいきたい。